

## 第一章 主権者または国家の支出（十一）

### 第三部 公共事業・公共機関の支出（八）

#### 全年齢の人々の教育機関に要する支出（二）

当時、聖職者の力は、想像し得る限り最も強力な「武器」だった。工芸や製造業が未発達だった欧州では、聖職者の富が庶民への影響力の土台となり、その様相は大貴族が家臣・小作人・従者を支配するのと同様であった。君侯や私人の敬虔にもとづく寄進で得た広大な荘園には、大貴族と同じく領主裁判権が付され、聖職者は自ら、または代官を通じて王の助けなしに治安を維持し、王も彼らの同意や支援なくしては介入できなかった。その結果、聖職者の男爵領や荘園の司法権は世俗の大領主並みに独立し、王の法廷を事実上退けた。小作人の多くは任意契約のもと主の裁量に従い、召集されれば直ちに動員され、聖職者が望む争いに参加させられた。さらに聖職者は、十分の一税によって各王国の他の所領から上がる地代の大きな取り分を得ており、これら二種の収入の多くは穀物・ワイン・家畜・家禽などの現物で納められた。供給は自家消費を大きく超え、

交換に回す工芸品や製造品が乏しかったため、余剰は大貴族にならって惜しめない饗応と広範な慈善に充てられた。実際、彼らの饗応と慈善は手厚く、各王国の貧民のほとんどを扶助し、多くの騎士や紳士が信心を口実に修道院を巡ってそのもてなしを糧にした。個々の高位聖職者の被官の数が最大級の俗人領主に匹敵することもあり、聖職者全体の被官数が世俗領主全体を上回った可能性すらある。しかも聖職者は教皇の権威の下、規律と序列に服する強固な結束を備えた一方、世俗の領主は共通の規律や上下関係を欠き、互いにも王にも常に疑心を抱いていたため、たとえ人数で劣っても、聖職者側の結束は脅威を倍加させた。加えて、饗応と慈善は動員力の源泉であるだけでなく霊的影響力を高め、施しに頼る下層の人々に深い敬意と崇敬を根づかせた。こうして聖職者の財産・特権・教義は神聖視され、その侵害は事の真偽を問わず最大級の冒瀆と受け止められたゆえに、君主が少数の大貴族の連合すら持て余すような場合、国内の聖職者の結束に周辺諸国の聖職者が加わる勢力を退けるのはいっそう難しく、むしろ注目すべきは屈服したか否かではなく、それでも抗し得た例があったことである。

古代の聖職者特権は現代の目には不合理に映るが、当時の秩序と社会構造からすれば自然で、むしろ不可避の帰結だった。典型は、世俗司法の管轄からの全面免除で、イン

グラントのいわゆる「聖職者の利益」に当たる。聖職者団が結束して身内を守り、「神聖な人物を有罪とするには証拠が乏しい」「聖別された身にその刑を科すのは過酷だ」と異議が唱えられるたび、統治者が処罰を押し通せば、統治そのものが大きな危険にさらされた。だからこそ、最善で賢明な対応は、当該聖職者の審理を教会裁判所に委ねることだった。教会側には、自らの身分と地位の名誉を守るため、構成員の重大犯罪はもとより、民心を冷やし離反を招きかねない醜聞の芽を、できるかぎり摘み取ろうとする強い動機と利害が働いていたのである。

欧州の大半は十世紀から十三世紀を通じ、前後の時期もおおむね同様の状態にあった。当時、ローマ教会の体制は、世俗統治の権威と安全、そしてその庇護の下で守られる人間の自由・理性・幸福に対抗する、史上最強の連合と見なされた。この体制の下では、迷信にもとづく重大な誤りが、きわめて多くの人々の私的利益に支えられ、理性の批判から実質的に保護されていた。理性は、庶民にも理解できる一部の誤りを暴くことはできても、そうした私的利益による結束を解きほぐすことはできなかったからである。もしこの体制が、理性のささやかな作用以外の脅威にさらされなかったなら、長く存続していたに違いない。ところが、人間の知恵や徳をいかに尽くしても揺るがせなかった巨

大で堅固な体制は、事物の自然な推移によってまず弱まり、続いて部分的に崩れた。おそらくさらに数世紀を経れば、全体が完全に瓦解する可能性が高い。

技術・製造業・商業の漸進的な発展は、大貴族の勢力を弱めたのと同様に、欧州各地で聖職者の世俗的権力も低下させた。聖職者は大貴族と同様に、新しい商品との交換を通じて自らの産物を流通させ、収入の多くを他者に配るのではなく自己消費に回しやすくなった結果、慈善は細り、もてなしは気前とゆとりを失い、使用人や従者は減ってやがて姿を消した。さらに私的な虚栄や無駄な消費を満たすため地代の引き上げを求め、その実現には直営から小作への転換が不可欠で、小作人は彼らから大きく自立した。こうして下層の人々と聖職者を結びつけていた利害の糸は次第にほどけ、大貴族の場合より早く断たれた。教会の恩職は概して所領が小さく、その受給者は収入を比較的早く自分のために使い切れたからである。十四世紀と十五世紀の大半、欧州では大貴族の勢力はなお強力だったが、聖職者が多数の庶民に及ぼしていた絶対的な支配力は大きく後退した。この時期、教会の力はほぼ精神的権威に限られ、その権威も慈善ともてなしという裏付けを失って弱まった。下層の人々にはや聖職者を困窮時の頼りとは見なさず、むしろ富裕な聖職者が従来は貧者に充てられてきた資源を自らの享楽に費やす姿に、虚

栄・贅沢・浪費への怒りと嫌悪を募らせた。

欧州の諸君主は教会の高位聖職人事への影響力を取り戻そうとして、司教選挙の伝統的権利を各教区のデーンと参事会に、院長選挙の権利を修道士に回復させた。旧来の秩序の再建は、イングランドの十四世紀の制定法群、なかでも「プロヴィゾーズ法」に明確であり、フランスでも十五世紀の「プラグマティック・サンクション」により同趣旨の枠組みが整えられた。選挙の成立には君主の事前同意と、当選者に対する事後承認が条件とされ、名目上は自由選挙でも、君主は地位上の優位から自国の聖職者に強い間接的影響を及ぼし得た。同種の規定は欧州各地で整えられたが、宗教改革以前に教皇の高位聖職叙任権をこれほど効果的かつ広範に抑え込んだのはフランスとイングランドである。さらに十六世紀の「コンコルダート」により、フランス王はガリカン教会の主要、すなわちコンシストリアル級の聖職禄すべてに対する専権的推薦権を得た。

プラグマティック・サンクションの公布とコンコルダートの締結後、フランスの聖職者は他のカトリック諸国に比べて教皇庁の布告をそれほど重視しなくなり、国王が教皇と対立すれば、ほぼ一貫して国王側に立つようになった。この相対的な独立性は、主としてこの二つの制度に由来すると考えられる。ただし、より早い時期にはフランスの聖

職者も他国と同様、教皇への忠誠が強かった。カペー朝のロベール二世がきわめて不当な破門を受けた際には、従者ですら彼の食卓の料理を犬に投げ与え、彼に触れて不浄とみなされた物には自ら口をつけなかったという。こうした振る舞いを民衆に教え込んだのは、彼の領内の聖職者であったと見られる。

ローマ教廷は、高位受益職や大受益職の叙任権を主張し、それによってしばしばキリスト教世界の強大な君主・主権者の権威を揺るがし、ときに覆すことさえあった。ところが、この主張は宗教改革以前から欧州各地で抑え込まれ、制限や条件付きの修正を加えられるか、あるいは全面的に退けられた。聖職者の民衆への影響力が弱まるにつれ、国家の側の統制と影響力はむしろ強まり、その帰結として、聖職者は国家を揺さぶり騒がせる力も意欲も次第に失っていった。

ローマ教会の権威が衰えつつあった頃、宗教改革に繋がる論争がドイツで起こり、やがて欧州各地へ広がった。新教の教えは各地で民衆の支持を集め、既成権威に挑む運動に特有の熱狂を帯びて伝播した。説教者たちは、既成教会を擁護する神学者に学識で必ずしも勝ってはいなかったが、教会権威を支えた観念の起源や展開、教会史の知識ではおおむね優位に立ち、論争を有利に進めた。禁欲的で規律ある生活は、身近な聖職者の

乱れた素行と鮮やかな対照をなし、庶民の目にいつそう説得的に映った。さらに彼らは大衆の心をとらえて改宗者を増やす術に長け、対抗勢力を大きく凌いだ。他方、そうした術は威厳を重んじる高位聖職者には長らく不要と見なされ、磨かれてこなかった。新教は理性への訴えで一部を、斬新さで多くを、既成聖職者への嫌悪や軽蔑でさらに広い層を引きつけたが、最大多数の支持を呼び込んだのは、各地で用いられた熱心で情熱的、時に素朴で粗野な弁舌であった。

新たな教義は各地で広く受け入れられ、当時ローマ教皇庁と不和だった諸侯は、その勢いを背景に自領の旧来の教会体制を覆した。教会は庶民からの尊敬と畏敬を失い、抵抗力は乏しかった。教皇庁がドイツ北部の一部の小諸侯を軽んじて不興と怒りを買ったため、彼らは歩調を合わせて自領で宗教改革を導入し、定着させた。クリスティアン二世とウプサラ大司教トロルの専横は、グスタフ・ヴァーサにより両者がスウェーデンから追放される事態を招き、教皇がなお両者を擁護したにもかかわらず、ヴァーサはスウェーデンで宗教改革を難なく根づかせた。のちにクリスティアン二世はデンマークでもその振る舞いが災いして退位に追い込まれ、同国でもスウェーデン同様に憎悪と忌避的となった。教皇は彼を支持し続けたが、その王位を継いだホルシュタインのフレデリ

クは、ヴァーサの先例にならって報復として宗教改革を進めた。ベルンとチューリヒの当局も、教皇と特に争っていたわけではないが、各州で比較的容易に宗教改革を実施した。直前に一部の聖職者が露骨で悪質な詐欺まがいの手口に手を染め、聖職者階層全体の威信が失墜し、嫌悪・軽蔑・嘲笑の的となっていたからである。

危機が深まるなか、教皇庁はフランスとスペインという二大王国との関係強化を最優先し、その支持の確保に動いた。当時のスペイン王は神聖ローマ皇帝でもあった。両国の後ろ盾のもと、両王国内では大きな困難と流血を伴いながらも、宗教改革の進行を食い止め、少なくとも大幅に遅らせることに成功した。教皇庁はイングランド国王との融和も模索したが、より強大なスペイン国王兼神聖ローマ皇帝カール五世の不興を恐れ、実行には踏み切れなかった。その結果、ヘンリー八世は教義の多くを受け入れないまま、宗教改革の広がりを背景に国内の修道院をことごとく解散し、ローマ教会の権威を国内から排した。これらの措置は、なお踏み込みは限定的だったが改革派を一定程度満足させ、やがて子の治世に政権を握った改革派が、この事業を容易に完成させた。

スコットランドに見られるように、政府の権威や支持基盤が弱く統治が不安定な国や地域では、宗教改革の勢いが強まり、教会のみならず、それを支えてきた国家体制や国



家権力まで覆された。

宗教改革の支持者は欧州各地に散在していたが、ローマ教皇庁の法廷や普遍公会議のように、異論を最終的に裁し、正統の範囲を統一的に定める権威ある共通機関は存在しなかった。そのため、国境を越えて改革派の見解が食い違っても、共通の上訴先や裁定者はなく、紛争は解けないまま積み重なった。なかでも、教会統治の制度や聖職叙任権をめぐる争いは、市民社会の平和と福祉に直結する重大事だった。結果として、改革派内部にルター派とカルバン派という二宗派が生まれ、欧州の一部では、法として定められた教義と規律はこの両派に限られた。

ルター派と英国国教会はいずれも司教制を概ね維持し、聖職者の上下関係を制度化したうえで、領域内の司教職や受益職の任免権を君主に帰属させ、君主を実質的な教会首長とした。一方、小受益職については司教の補任権を残しつつ、君主や俗人パトロンの推挙も認め、むしろ奨励した。この統治体制は当初から平和と秩序、そして世俗の主権者への服従を促す仕組みであり、体制が定着した国でこれが騒乱や内乱の火種になった例はほとんどないとされる。とりわけ英国国教会には、自らの原理は瑕疵なき忠誠に根ざすとの強い自負がある。こうした体制のもとで聖職者は、昇進の鍵を握る君主や

宮廷、国内の貴顕や地主・資産家の信任と評価を得ようと努める。露骨な追従に流れることもあるが、多くは実学から教養にわたる幅広い学識、節度と品位ある礼儀、社交的で穏やかな会話術を身につけるうえ、評価を得るために、禁欲を説き自らも実践しているかのように装って民衆の感情を煽り、禁欲を実践しないと公言する有力者への嫌悪まで煽る狂信派の不合理と偽善を、公然と退ける道を選ぶ。ただし、こうした聖職者は上層への働きかけに偏り、下層に対する影響力と権威を保つ手立てをおろそかにしがちである。結果として、上位者には耳を傾けられ敬意も受ける一方、相手がどれほど無学な熱狂家であれ、下位の人々の前では自派の穏健で中庸な教義を効果的かつ説得的に擁護できないことが少なくない。

対照的に、ツヴィングリの流れをくむカルヴァン派は、教会の牧師職が空位になるたび各小教区の住民に選任権を与えとともに、聖職者間の平等を徹底した。制度のうちに、前者の選挙制は実施期間中、混乱と無秩序を招き、聖職者と一般信徒の道徳を等しく損なったとされる。これに対し、後者の平等原則は、概して望ましい効果をもたらしたと評価される。

住民が牧師を選べた時期の選挙は常に聖職者の影響下にあり、とりわけ党派的で狂信

的な者が主導した。聖職者は影響力を守るため自ら狂信を装い、民衆を煽って最も過激な候補を担ぎ上げ、教区の牧師任命のような小事であっても、周囲を巻き込む激しい争いへと発展させた。大都市では住民が二分され、とりわけその都市が小共和国やその首都である場合には、スイスやオランダの有力都市に見られるように、些末な争いが党派対立を先鋭化させ、教会の新たな分裂や国家の新派閥を生むおそれがあった。このため小共和国では、公の安寧を守るため、空位の聖職の呈示権を行政官に一元化する措置が早くから講じられた。長老制が最も広がったスコットランドでは、ウィリアム三世の治世初期の長老制確立法により、パトロネージ（推挙権）が実質的に廃止され、各教区の一部住民がわずかな代価で牧師の選任権を買い受けられるようになった。この制度は二十二年ほど続いたが、大衆選挙が各地で混乱を招いたため、アン女王の治世第十年法第十二章によって廃止された。もともと、広大な同国では、辺地の騷擾が政権を揺るがす度合いは小国ほど大きくはなかった。同法で推挙権は復活し、原則としてパトロンの呈示した候補者に受益職を与えることになったが、教会は平穏維持を理由に、教区民の同意が整うまで赴任や司牧権の付与を引き延ばすことがある。近隣の聖職者が水面下で同意を取り付けたり妨げたりし、大衆迎合の術が磨かれていくという構図が、スコットラ

ンドに残る狂信的な氣風を支える一因とみられる。

長老派教会の統治は、聖職者間の平等を二つの面で確保している。第一に、教会權威ならびに教会法上・司法上の管轄における平等、第二に、俸給や受益の平等である。長老派諸教会では前者は徹底しているが、後者はなお十分とはいえない。それでも俸給や受益の格差はおおむね小さく、俸給の低い職であっても、任地や地位を良くするために後援者に迎合して取り入ろうとする誘因は生じにくい。国教体制の下でパトロネージ（後援・任用の權利）が制度化されている場合、公認の聖職者は、学識、非の打ちどころのない生活、職務を忠実かつ精力的に果たすことといった資質によって、上位者の評価と信頼を得ようと努める。後援者がその自立や独立心を恩知らずと受け取ることはない。実際には「これ以上の便宜は望めない」という自覚から生まれる、落ち着いた節度ある距離感にとどまる。ヨーロッパ各地を見渡しても、オランダ、ジュネーヴ、スイス、スコットランドの長老派聖職者ほど、学識と品位、独立性を備え、社会から広く尊敬を集める層はまれである。

教会の俸給が概ね横並びで、しかも過度に高くない場合、この平準化は行き過ぎれば弊もあるが、好ましい効果ももたらす。資産に乏しい聖職者に品位や威厳を与えるのは、

模範的な道徳だけである。軽薄や虚栄に流れれば滑稽に映り、庶民と同じく本人にも大きな損失となる。ゆえに彼は、庶民が最も重んじる道徳や規範に従わざるを得ない。自らの利害と立場にかなう生き方が、そのまま庶民の敬意と親しみを引き出すからである。庶民は、身近でありながら本来は自分たちより上位の立場にある人として彼を見て、自然に好意と親近感を抱く。この好意は相互作用し、彼は教えることと教化に心を配り、援助や救済にも細やかに心を砕く。味方である庶民の偏見を退けたり見下したりせず、富裕で手厚い給付を受ける教会の高位聖職者にしばしば見られる侮蔑や傲慢さを示さない。結果として、長老派教会の聖職者は、他の国教会の聖職者よりも庶民の心を強く動かしている。長老派の国々では、迫害を伴うことなく、庶民が国教へほぼ一人残らず改宗する例が見られる。

教会の俸給が低い国では、大学教授の待遇のほうが良く、大学は最大の文人層である聖職者から広く人材を引き寄せられる。これに対し俸給が高い国では、強い後援を得た教会が大学から有力な学者を引き抜くのが通例である。前者の大学には国内屈指の学者が集まりやすい一方、後者では卓越した学者は少なく、いたとしても若手が多く、経験を深める前に流出しがちだ。ヴォルテールは、イエズス会のポレー神父は大きな名声こ

そなかったが、フランスで読むに値する著作を残したただ一人の教授だったと述べ、偉才を多く生んだ国で大学教授に著名人がほとんど見当たらない現状を奇異だと評している。ガッサンデイも若くしてエクス大学で教えたが、教会に入れば研究に適した静かで安定した生活が得られると勧められ、ほどなく聖職に転じた。こうした状況はフランスに限らずローマ・カトリック諸国全般に当てはまり、法学と医学を除けば、大学教授として名を上げた学者はまれである。ローマ・カトリック教会に次いで裕福なイングランド国教会でも、教会が大学から最優秀層を吸い上げるため、欧州で名の通った老練のカレッジ指導教員が大学にとどまる例は、カトリック諸国と同様に少ない。これに対し、ジュネーヴ、スイスのプロテスタント諸国、ドイツのプロテスタント諸国、オランダ、スコットランド、スウェーデン、デンマークでは、その国の主要な学者の多くが大学教授を務め、大学は教会から優秀な学者を継続的に引き入れてきた。

注目すべきは、詩人と一部の弁論家・歴史家を除き、ギリシャとローマの著名な文人の多くが、公私の場で主として哲学や修辞を教える職に就いていたことだ。この傾向は、リュシ阿斯、イソクラテス、プラトン、アリストテレスの時代から、プルタルコス、エピクテトス、スエトニウス、クインティリアヌスの時代まで一貫して見られる。特定の

学科を年々教える義務は、その人物を当該分野の熟達者へと導く最も有効な仕組みであり、同じ範囲を毎年講じること、力量ある者は数年で全体に通曉し、ある年に早計な判断があっても翌年に同じ主題を講じ直す中で容易に改められる。教えることは文人にとって自然な務めであり、堅実な教養と知識を身につけるうえで最も有望な方法でもある。聖職俸給が中程度の国では、文人の多くは自然に公共に最も資する職務へ向かい、同時に最良の教育を受ける環境にも恵まれやすい。その結果、彼らの学問は、可能な限り堅固で、かつ有用なものになりやすい。

各地の公定教会の歳入は、特定の土地や荘園の収益を除けば、本来は国家の一般財源に帰すべきもので、国防など公共のための資金が別の目的に回っている。十分の一税は実質的には地租であり、土地所有者の国防への拠出力を削ぐ。しかも大規模な君主国では国家の最終的な財源は地代とみなされるから、教会への配分が増えるほど国家の取り分は減る。条件が同じであれば、教会が富むほど君主または国民のいずれかが貧しくなり、国家の自衛力は弱まる、という原則が成り立つ。実例を挙げれば、プロテスタント諸国、とりわけスイスのプロテスタント諸州では、かつてローマ・カトリック教会に属した十分の一税や教会領が、公定聖職者への十分な俸給のみならず、国家のほかの経費

の大半までを、ほぼ追加負担なしで賄う基金となっている。ベルン州ではこの基金の剰余から数百万の積立を行い、一部は公庫に保管し、残りは欧州の負債国の公債に利回り目的で投資しており、主な投資先はフランスとグレートブリテンである。ベルンや他のプロテスタント諸州で公定教会が国家に負わせている費用の総額は不詳だが、精密な計算によれば、一七五五年のスコットランド国教会の聖職者の総収入は、教会付属地や牧師館の合理的な家賃評価を含めても、わずか六万八千五百十四ポンド一シリング五ペンス半にすぎず、それでも九百四十四人の牧師が、つましくも相応の生活を維持している。教会全体の支出も、教会堂や牧師館の新築・修繕を含めて、年八万ないし八万五千ポンドを超えるとは考えにくい。しかも最も富裕な教会でさえ、信仰の一致、敬虔の熱、秩序と規律、民衆の厳正な道德の維持のいづれにおいても、この薄給のスコットランド国教会に勝るとは言いがたい。公定教会に期待される宗教的・市民的効用は、スコットランド国教会が遜色なく生み出している。スイスの多くのプロテスタント教会も、資金規模はスコットランド国教会と同等かそれ以下ながら、むしろより高い水準で同様の効果を上げている。大半のプロテスタント諸州では、公定教会以外を名乗る者はほとんどおらず、他宗派を公言すれば州外退去を命じる法律がある。ただし、こうした抑圧的な



法律は、自由な国では、聖職者の不断の働きかけにより住民のほぼ全員があらかじめ公定教会へ改宗していなければ、実際には執行できなかったはずだ。スイスの一部では、プロテスタント地域とカトリック地域が偶然併合されたため改宗が徹底せず、両宗派は容認されるだけでなく、法により並立している。

職務が適切に果たされるには、報酬はその内容に見合うよう、できるかぎり正確に定められなければならない。報酬が少なければ従事者の資質や力量が損なわれて職務の質は下がり、過大であれば怠慢や遊惰や無為を招き、かえって害が大きくなる。高収入を得る人は職業を問わず、同程度の富を持つ層と同じ暮らしを望み、宴席や祝い事、歓楽や虚栄、放縦に時間を費やしがちな。とりわけ聖職者にとっては、こうした生活は職務に充てる時間を奪うのみならず、務めをしかるべき重みと権威をもって果たすために不可欠な聖性という人格的資質が、市井の目にはほとんど失われたかのように映る。